



目次

河上肇没後四十周年・全集完結

記念講演会ご案内

六〇年度総会特集　～自己紹介より～

河上肇における「陽明学」と「天才自然学」

佐藤 克己

ひとこと釈明させて下さい……二村 一夫

ひとことおわびいたします……松尾 尊兌

会員通信

(2) (1)

(36)

(41)

(43)

(44)

河上肇 没後四十周年 記念講演会のご案内

全集完結

〈京都会場〉

五月十日(土) 講演 午後二時～四時半

於 立命館大学 末川記念会館ホール

開会の辞

立命館大学教授 堀田庄兵衛氏

河上肇と天皇制

立命館大学教授 岩井 忠熊氏

朗読・河上肇の作品から アノソボ座 西垣 豊子氏

全集にみる河上肇の人間像

元甲南大学学長 杉原 四郎氏

閉会の辞

河上肇記念会世話人 大門美太郎氏

同日 記念パーティ 午後五時～七時

於 同会館 第五会議室

パーティ会費 四、〇〇〇円

〈大阪会場〉

五月二十四日(土) 講演とビデオ 午後二時～四時半

於 第一生命ビル(梅田) 好文倶楽部ホール

開会の辞

河上肇記念会世話人代表 杉原 四郎氏

テレビ評伝 河上肇

河上肇と中国文学

神戸大学教授 一海 知義氏

閉会の辞

河上肇記念会世話人 大門美太郎氏

同日 記念パーティ 午後五時～七時

於 同クラブ会議室

パーティ会費 七、〇〇〇円

なお、同封のハガキに両会場の講演会および記念パーティのご出欠を四月末日までお知らせ下さい。

(パンフレットを二、三枚同封いたします。宣伝をノ)

昭和六〇年度河上肇記念会総会特集

出席者自己紹介より

事務局（大久保）わざわざお見えいただきまして、ありがとうございます。

ちょうど一〇月二〇日という、いろんな意味で河上には因縁の深い日にこういう機会を持って非常に喜んでおります。

きょうは松尾先生のご講演をいただくわけでございますけれども、遠くからお見えいただきまして何もお話にならないでお帰りになっていたく方々が毎年相当数ございます。何度もお目にかかりながら、私どもは「きりという方かも知じ上げないままに何年も過ごしてきているという方々にも、きょう受付をやっておりまして、お目にかかったようなことでございますので、きょうはまことに恐縮でございますけれども、順番にここに出てきていただきまして、ぜひとも自己紹介をお願いして、またお食事をしながらお席の方で相互にいろんなお話をしていたいだいたら、こういうふうに思っております。

皆様に一言ずつお話しただくだけで約二時間という時間を要しますが、中身の濃いお話を伺いたいと存じます。ひとつよろしくお願いいたします。（拍手）



林 辰彦 若輩ですが、一番初めにご指名を受けまして、一言ごあいさつをさせていただきます。

一〇月が来まして、

法然院にやってきて河上先生はこの会に出ることは、河上先生の追悼という意味もさることながら、嫌なことばかり、おかしなことばかりある現在、私としては一服の涼風に吹かれるような思いでございます。

もう六六歳ともなりますと、平均年齢はかなりまだあるようですけれども、身辺寂寥としてきますので、私も

やがて死ぬということをも一つの哲学にして一日一日を生きております。

女房や子供は現代の風潮になじんで、解放だの自由だの平等だのと、またアメリカの風潮も受けて、男の受難の時代が確実にやってきているということを日常つぶさに体験しております。結局これは女の幸福にはつながらなくて、女はまた男以上に不幸になるんじゃないかということを考えながら、一人で満足しております。子供や女の変貌はすさまじいものがあります。

私は五二歳でアラブに恋をしまして、五八歳までに五回行きました。大阪で読売新聞にいた関係上、英語もフランス語もアラブ語もできないので、よし、それでは頭とハートと目を使って二カ国歩いてやれということで、五年かかって二カ国歩きおえまして、『アラブは燃えている』という本を書きました。また、毎月上京しますが、東京にいるアラブの大使一人にインタビューして、日本とアラブというものを書いたことが、東京の記者に對する関西の記者の一つの抵抗であると、みずから満足しております。その意味で、東京大学に對する京都大学、こんなこと言ったら、いまさはおまえはと言うかもしれませんが、これこそ京都大学あるいは京都大学を出た人

間に日本の将来との関係があるんじゃないかというようなことを、私は誇りを持っております。

私は経済部の記者をしていたんですが、三三歳でかけだし記者、定年五五でばっかり首を切られました。それはよかったと思っておりますが、経済記者にふさわしく何かを書きたい書きたいと思っておりますところ、去年の暮れ、ダイヤモンド社から、私が現役時代八年間お世話をした井植学校について書いてくれということがありましたので、自信がなかったんですが、机に向かって四月に原稿を五五〇枚書きました。自己宣伝みたいになりますが、それが一週間前に『実録井植学校―関西経営者を育てた思想と哲学―』という本になって出ました。

現在私、松下幸之助をもう四〇〇枚書いているんですが、年内にあと四〇〇枚で八〇〇枚にしたい。私は、はつきり申し上げますと、財界人とか大企業のオーナー、トップは本当に嫌いでした。しかし、三洋電機の井植盛男という創業者は実に魅力のある中小企業の象徴的な社長であるとともに、夢とロマンにおいては大企業の大学出の社長に絶対負けない、男にも好かれ愛され、女にも好かれ愛される存在であるということを、私感じまして、森下、サントリーの佐治、ダイエーの中内、ダイワハウ

スの石橋、そういう連中二人が帝王学を学ぶ学校として
まして八年間、井植さんが死ぬまでプロモーターとして
お世話してきました。「井植学校」は私でなければ書け
ない井植学校であつたわけですが、たまたまどこでどう
聞いたのか、ダイヤモンドからお話がありまして、書い
て本になったわけです。

私は河上先生の弟子として井植さんを書き、松下を書
いている。関西財界の、しかも弱電三家の二人のトップ
をどういうふうに書いたかという文章の中に、せめても
河上先生の弟子の末端をけがす私としまして、その何が
しかがあらわれていれば満足だと思います。

私と駒井徳三、これは宇都宮徳馬先生の義理のお父さ
んですが、そういう関係で華北交通へも就職しましたが、
戦争に負けて華北交通へは行けず、講談社、それから学
校の先生、それから新聞記者と職業遍歴をしたんですが、
この序文に私はこういうことを書きました。「私はこれ
までの人生において出会い、関係を持ち、そして私の人
間形成に強い現実的な影響を与えた人を挙げるなら、河
上肇（経済学者）、駒井徳三（満州国の初代総務長官）、
宇都宮徳馬（政治家）の先生と井植さんである。変な組
み合わせは、大なり小なり学生時代から今日までの実社

会における私の人生、私の思想と行動の変化や推移の反
映でもある。組み合わせはどうであれ、人生において迷
うことなく指名できる幾人かの私淑できる人を持ってい
ることは幸せなことである」と。

文章の中では、また宇都宮先生のお嬢さんの結婚式に
井植盛男さんが出まして、中国問題で苦労している一
匹狼、そのお嬢さんが関西のある薬屋の社員と結婚した
ということば、関西にとっては非常に喜ばしいと。なぜ
ならば、うるさい秘書であり、唯一の宇都宮先生に対す
る批判者であるお嬢さんが関西へときどき来ることは、
また我々にとっても非常に嬉しいことであるという初辞
を井植さんが結婚式で述べた。

そういう意味で、また私はこの井植学校を引っ下げて、
川勝伝さんなんかも行かない前に、ひとつ井植学校で中
国へ行こうと言ったら、井植さんは、よっしゃ、行こう
と。ところが、森下や佐治さんなんかは商工会議所の会
頭とか取引銀行の頭取に相談したところ、時期尚早
ということとびびったわけです。

井植盛男は、淡路島出身の小学校しか出ていなくて、
ナショナルを支えた後松下とたもとを分かち、四三歳で
三洋電機を興した。弱電という時流に乗った企業であり

ますけれども、大をなし、八年間私が経済記者として井植学校をお世話をしたことを、幾つかの思い出の中の一つの楽しい思い出としてこの本を書きました。もしお目につきましたら、一二〇〇円ですが、お買いいただきたい。

自己紹介を兼ねまして本の宣伝をさせていただきます。(拍手)



荒瀬武三郎 私は河上先生の講演に懐いたこともありまし。

河上先生を知ったということは、自叙伝を読んだ、あるいはほかの私の生き方の指針として生きているわけでございます。これからもういう意味で、この河上会の末尾の一員として、よろしくお願ひしたいと思います。(拍手)

木村誠一 えらい若輩者で、最初から挨拶の場所を与えられて、非常に困惑しております。私自身、河上会に



は、大分鎮に京都府の資料館で大きな展覧会がありましたときからしばらくして入ったわけです。

そもそも関心を持ち

ましたのは、高校一年のときに社研や経済研究会をやりまして、宮川実先生の『経済学入門』とか『第三貧乏物語』をまずテキストにやり、その後河上先生の『貧乏物語』を勉強し、若干学生運動なんかもやってきたわけです。

僕自身、そういった河上先生の本を読む中で自我を形成してきたと思っています。父は自民党の選挙参謀なんか常にとっておりまして、父は非常に心配しました。そういった中で、私は立命館大学法学部に入ったんですけど、おやじといつも喧嘩ばかりしてまして、結局中退。きょうもここに皆さんの非常にお元氣なお姿を拜見して喜んでおります。こういった会では、学校時代に読んだ図書を書かれた先生方、杉原先生もそうですけども、いろんな先生方にお会いできるのを非常に楽しみにして来るんですが、忙しいもんで、二年に一回か三年に一回ぐ

らしいか来れてないんです。残念ながら若い方が少なく、非常にびびっているわけですが、もうちょっと暇ができたなら、お世話をしたいなあというふうに思ったりしております。

実は私、今堀川病院にいます。住民立のような病院ですから、一九年ほど地域の資金を集める責任者をしていましたんですが、六年ほど前から健康管理の仕事をしております。ここにおいでの上様などついでにだま健康をやらせてもらうてたんです。そういうことで、私が非常に尊敬している先生方、本当にお元気で活躍してほしいと思いますが、私自身も非常に啓蒙されるものがありますし、寄せていただきたいと思っております。

また暇をつくって、もう何年かたちましたら、お世話をしながら、若い人がこういった河上会に結集して、すばらしい社会科学の火を絶さないような活動をする必要がないかと。非常に厳しい状況になってきておりますし、よけいにかつての苦しい時代を認識しながら新しい方向づけをし、住民の立場に立ったヒューマンな活動を続ける必要があるんじゃないかと思っっている次第です。(拍手)



武元 勲 今回初めて寄せていただきました。よろしく願ひいたします。

実はこの会を知りましたのは、河上先生という方がいらっしゃるという程度には本などでは存じ上げておったわけでございます。今も法然院の周りは若い方がたくさんいらっしゃいます。昔とは大分機相が変わりましたが、私も昔、法然院の静かなたずまいといましようか、こういう雰囲気が非常に好きでございました。哲学の道を歩くというようなことなどもよくしておりました。そのときに、今お参りさせていただきましたお墓の、辿り着き振返り見ればという万葉仮名の石碑の横に名刺受けがございまして、そのときどう考えたのか、名刺を置いておいたわけでございます。しばらくすると、この会の事務局からご鄭重な礼状が参りまして、こんなに懇切に扱っていただけたところであれば、ぜひ私も仲間に入れていただければと思ひまして入会をさせていただきます。ことしで三年ぐらいになろうかと思ひます。

この二年ぐらいは、ご案内をいただきながら、たまた

ま仕事が重なって来なかったわけですが、今回は非常に楽しみにいたしておりました。こういう厳かな雰囲気と、寄せていただきますと、長老の方々ばかりでございまして、私どもは片隅で肩をすばめていなければならぬような感じではございますけれども、先ほど来おしい食事もいただきましたし、各界のいろんな先生方のお顔も拝見することもできますし、いろいろ教えていただくことも多かろうと思います。

先ほど、東京の方で河上会の仕事をしていらっしゃる、あるいは会員で活躍をしていらっしゃる方と帰り道お話をしておりましたが、やはり京都のこの場所の河上会の総会が一番だねとおっしゃっていただきました。私もまことにそのとおりだと思いました。こんなところで同席させていただくことを非常に光栄に思っております。今後ともよろしく願ひ申し上げます。(拍手)



佐田季男 上座から失礼いたします。司会者の方は時間を大分気にしておられるんじゃないかと思っておりますので、

簡単に自己紹介します。

六〇年に一年を余す齡でございまして、きょうで第四回目でございます。私、こちらへ参りますのは、河上先生の遺志をお継ぎになった諸先輩の話を聞くのがただ一つの私の喜びでございまして、きょうの席に出ますことが私の本当の喜びでございます。あとはゆっくりと諸先輩のいろいろな話を聞きたいと思っておりますので、簡単にですが、ご挨拶にかえさせていただきます。(拍手)



松本 策 沼津で老人ホームをやっております。主人が河上先生にお会いしたことがあって、その後主人に言われて、僕が死んでも、

君は年が若いから京都の河上会に入りなさい、僕は東京の河上会に入るからといって夫婦で別々に会員になっておりました。去年主人が亡くなりまして、つくづく思うのに、主人が言ってくれたことは本当によかったなと。一年に一編こちらに何うことは、私の一年に一編の楽しみでございます。そして、皆さんの話を聞いて、勉強

にもなるし、これからも一生懸命やっていきたいと思ひます。

こないだの会報を見ましたときに、いろいろな意見が載っております。あれを読んではよかったことは、主人がいつも言っております。先生の書いた本に嘘は一つもない、思い違いはあるかもしれないけれど嘘は一つもないと。僕がこの前原稿を書いたときに、東京の白石さんから、君の文章は正直な文章ですと褒められたのが一番うれしい。六〇年間にこんなうれしい言葉を聞いたことはないと言って喜んでおりました。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。(拍手)



近藤 浩 大阪の大

手門学院大学に勤めております。私は経済学部出身ではなくて文学部の出身でして、経済部のことは余りよくわ

からないですけれども、学生のころ自叙伝を愛読しまして、以来、河上ファンであります。そういうことで、名目的に古くから会員にはしていただいております。

実はこの夏西ドイツで国際歴史学会がございまして、そのときに本会の世話入をして下さっている杉原先生と一緒させていただく、またとない幸運に恵まれました、そのときいろいろ河上肇についてのお教えもいただいたんですが、この会についても参加してみないかとお願いを受けて、本場に若輩ですけれども、恐る恐る参加させていただいた次第です。

本日はどうもありがとうございました。(拍手)



小田正大 堺から来

ました。昨年からこの会に出席させていただいております。私が河上先生を知りましたのは、弟が昭和二九年か

ら三三年京都の経済でマルクスを勉強しましたんで、河上先生の孫弟子か曾孫弟子かという関係で、その間法政院に連れてこられたり、自叙伝を紹介されたりしまして、弟を通じて河上先生を知ったのでございます。河上先生の自叙伝や夫人の留守日記のことを読みますと、先生も偉かった、奥さんも偉かったというのが、私をこの会に

引きつけたところでございます。

今後もしよろしくお願いしたいと思っております。(拍手)



小泉恭次 七七歳に

なります。ちようと昭和
三、四年ごろ同志社
に行っておりまして、
京都の公会堂で河上先
生が病室で「井土中止」

というのに遭ったのがきっかけのように思います。それ
から、先生の本などを読みながらまいりました。京都で
六年ほど前から『貧乏物語』を中心にした書談会があり
ますが、最近これらに出席させていただいて、年寄って
まいりますけど、ますます河上さんの教えが京都で広ま
り、京都の中心になっていくことを念じております。

よろしく。(拍手)

藤本福太郎 ここにおられます大門さんの友人で三年
ほど前に亡くなりました杉崎(三八郎)という人がおっ
さんですが、最近出ました京都帝国大学の思想問題を扱
った書籍(『京都帝国大学学生運動史』)がありますけ



ど、それにも大門さん
も随分頻りにお名前を
出されております。そ
の共通の友人でありま
して、ここに見えてま
せんけども、小林寛井

護士とか、そういう方々とか宛先に届いております。な
おまた、ここ上林さんなんかもご出席でございますけ
れども、去年お見えになりました宇都宮先生とか川藤先
生がおやりになっているむよう会というのがございまし
て、ここにお見えになっている毎日新聞の小嶋さんがお
世話をなさっている。そこに参加させていただいて、い
ろんな会合で共通の会友としてお目にかかる機会があり
ますもんですから、数年前からこの会にお邪魔しとるよ
うなことでございます。

小さな会社とともに一つの同人社というのをやってお
ります。ジュエントロジーといいますか、老人医学的な
面から、体の減衰することはやむを得ないけれども、頭
脳をできるだけ使うことによって、若返りはできないけ
れども、老化的速度を遅らしめることができるであろう
というところから、一二一三人の老人連ばかりの会で

ございますけれども、この同人社というのをやって、河上先生の自叙伝なんかも紹介しております。堀田先生が音読会を京都でおやりになっておりますけれども、私どももささやかながらそういうことをやりまして、できるだけ頭脳を使っていくということで、ささやかながらジュエロントロジーという面からの効果を期待してやっております。

以後、よろしく。(拍手)



児玉 誠 この会報

の裏に広告が出ております。郷里に煙あり。

その「煙」の発行者です。戦前日本プロレタリア文化運動の生き残りでございます。余り申すこともございませんけど。戦

前河上先生の愛弟子の太田遼一郎という人の数集を出しまして、そのときは大門さんとか小林さんとかに大波お世話になりました。内海先生にもお世話になりました。この「煙」というのは、一九六五年の創刊でたいた四九号ですが、ことし二一年目になります。まだしばらく

は続けたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

(拍手)



小嶋康生 ことしも

河上先生の理念、遺訓を継承される皆さんのお話をお伺いし、河上先生いますがごくそういうお話に接し、こ

れを私自身の糧とするために末席をけがしにやっております。

先だってある会合で、河上先生を現代の日本にどう生かすか、こういったことが議論になったわけですが、私も新聞記者二五年もやっていますと、もう方向を変えるわけにいかんし、河上先生べったりで、もうそれ以外のことはわからんですというようなことを言って、ある種の公式的な烙印を押されたわけですが。去年からことしにかけて、河上先生の太い大きな幹をどんどん伸ばしていかにやいかんということで、大門さん中心のむよう会であるとか、松本先生中心の本音を語る会とかいろいろな面が幹が出ておるといことは非常にうれしいことだと

思っております。そういう中から、いろいろ勉強もきしてもらい、今河上先生がおられたらどういうふうにおっしゃるかなということを常に頭に置きながら切磋琢磨しておるわけです。しかし、日常生活の中に埋没してしまふ。そして、法然院のこの席へ来てホッとするというのが長年続いております。

先だっても会報に、小谷さんという熊本大学の先生の巻頭言が出ておりました。小谷さんというのは関西経済同友会の事務局におりまして、私は七十八年、酒飲んだりのいろんなことをやってたわけです。ところが、河上先生の方の字も出たことない。日常生活の中では、お互い皆遠慮して、きょうは天気晴れてますなとか曇ってますなということと終わるとるけれども、結構河上先生の遺訓を受けた人々が根をはっている。これは思い切っているな場で言っていくべきだということを新たにしたいわけです。これからいろいろ皆さん方のお話を聞きし、いろいろ勉強していきたいと思えます。

きょう、本堂での法経に遅れましたのは、私、風谷に行っております。一〇月二〇日といいますと、京都大学の献体者の法要が毎年この日あります。私の方の年寄りには家訓として献体ということをしております。私の家

の墓は小さな村はずれのおんぼろですが、風谷に行けば大名と並ぶような大きな墓がございますんで、毎年一〇月二〇日に行っておるわけです。きょう、たまたま法然院の河上会とかち合います。こちらに来るのが遅れましたが、毎年一〇月二〇日をはずしていただければありがたいな思っております。(拍手)



上林 明 古い方ならご存じでしょうが、平治では山本宣治氏が河上先生とよう似たような経歴で、河上先生もそうでしょうが、学者でありながら結局政府に殺された。そういう経緯でございます。

私は電気工学に入って、羽村先生にちょっと縁があるんですけども、私が最初に聞いたのは三高の三年のときで、河上先生の資本論を聞きました。その中に、一つだけいいますと、物の価値というのを使う者が考えて需要がなかったらあかんのやとか、その時分、労働価値説とか何とかいのですが、これは労働の血と汗の塊で

あると、そういうことを非常に熱心に講義しておられたことを私は感じます。それ以来、私は河上先生は単なる学者だと思っておりましたが、私自身も戦争で引っぱり回されてあちこち行っている間に、りっぱなお方になられたようで、そういう意味で大変尊敬しております。

今いろいろお話がございましたが、私も実はもう余り命が長くないんで、お寺詣りに昔の人がよう行ったように、私はこういう会に出ることによって、私自体は体を清めさせてもらい、懺悔しているつもりでございます。

何もできませんが、しかし、最後まで自民党が中曽根みためにアメリカのご機嫌とったり自衛隊をふやしたり、核をもっとつくり思うたりしていることだけは、だれでも皆嫌で、わしは戦争に行くのは嫌や、戦争は嫌いや、核は嫌いや、平和を望むということを少なくとも皆に言えるようにだけはしたいと思っております。

どうもありがとうございます。(拍手)

大塚君子 新潟県から参りました。私は大変に不真面目で、この会に入りましたのは、京都に来る口実が出来るというのが一つございます。もう一つは、やはりこの



会に参りますと、すぐれたすばらしい先生方はいろんなお話をお聞きしまして勇気がわくものでございますから。

実はきょうはまだ二

回目なのでございますけれども、初めて参加させていただいたときは、何年前でしょうか、とても大勢でいらして、向こうの方にテレビがあったりなんかした会でございます。あの当時、私の住んでますところは田中角栄が大変権力を振っておりまして、息の詰まるような状態でございます。私が新潟県と言いますと、皆さんから何となし笑いが起きたりいたしました。そのとき、私は新潟県の民主的な考え、方の方たちの力が強いということを実に恥ずかしいと思つて、そういうことを申し上げたような記憶がございます。私はその後、おかしなきっかけから、田中角栄型の政治を追及する市民の集いみたいなものに関係するようになりまして、ことは一〇月一日に三回目の集会をいたしました。田中角栄が病氣になりましたも、地元の長岡では本当にまだ圧力が強く、何かしますときに、いつも一生懸命はねのけながら

やるという感じなんですよ。でも、ことは、一〇〇〇人ほどの会、おとしは二五〇〇人ほどの会をどうやらかちとることができて、少し元気が出たものですか。ことしまた参加させていただきまして、皆様のお話伺って、また元気出して帰っていきなす。

私、一人暮らしをして、女の一人って本当にいいなあと。男の人に全然くちばし入れられないで自分のしたいことをすることが出来ます。私が田中角栄の問題に携るのに、もしだんながいたら、いろんなこと言われるんじゃないかなと思って、その点、今の一人身を大変感謝しているわけですよ。今後ともよろしくお願いいたします。(拍手)

三木 勲 家内と一緒に和歌山から参りました。ここで先ほどから皆さんのお話を伺い、昔の学友にもお会いしまして、元気を大分回復いたしました。実は生涯の大部分を経営者運動にかかわってまいりましたけれども、このたび自由な体になりました。自由人としては一年生でございますが、これからさでという課題があるのか、どういふふうに取り組んでいくのか、その辺はこれから



の問題でございます。家内の分もあわせて、簡単にご挨拶を申し上げます。どうもありがとうございました。(拍手)



土居 勇
私は昭和二年に入って五年の卒業ですが、河上先生の京都大学の最後の講義に出席することができました。香川県の高松の片隅で細々と暮らしております。

昭和二年の秋、最後の先生の講義、それは改造社から出ている経済学大綱を聴講したものであります。私は勉強の方余りしなかったが、私には非常にいい点があった。大学に教授がたくさんおる。その当時の京都大学というのは日本一の経済学部であった。それで、私もいろいろな経過の後に京都大学へ昭和二年に入った。相当年がいていた。ことし私は満八四。天皇陛下と同じです。だから、本當言うと、四つぐらい普通の人よりも年がいていたと思います。

実際河上先生の講義というのは、私は初め文科に入っていました、だからちょっと難しいです。わかりません。しかし、一時間も欠席したことはありません。ノートは今でもちゃんと持っております。その当時の経済学部の先生方を見渡して、この先生はええ先生だ、この先生はいいかげんな先生だというのを見分ける点是非常に、今から考えてもよかったです。何といっても河上先生はその当時から一番偉かった。

あの当時改造社から全集が出ましたでしょう。あの全集が出たときに、第一巻にだれをするかという問題。河上先生の「経済学大綱」が第一巻。そして、河上先生のもう一つ「マルクス主義経済学の基礎理論」というのが

あとの巻に出ていますね。第二巻にだれをするか。当時東では福田徳三さん、西では河上先生、この二人が日本の経済学者の大風柱だった。だから、改造さんも考えて、第一巻には河上さんの「経済学大綱」、その次に顔を立てて福田徳三さんの二冊を置いた。第二巻、第三巻。それで、河上さんの二冊目をずっと後の巻に入れた。そういう経過があるんです。

改造社の全集を出すについて、京都の朝日会館で会をしました。そのとき、私も行きましたが、河上さんと福田徳三さん、論戦は白熱していましたよ。しかし、あの二人が握手してね。結局全集の宣伝に改造社からやってきたんですが、その光景も私見しました。まあこんな話しよったら果てがありませんけど。

もう八四ですから、皆さんの胸のお名前を見ても、私わかん。先ほども本堂へ参りましたら、隣に白い服を着た方がいらっしゃった。横を振り向いたら、鈴木洵子さんと書いてある。鈴木洵子さんというのは河上先生の二番目のお嬢さんの長女だ。初めてお目にかかって非常にうれしかった。もちろんこんなことは今度の全集の河上先生の日誌を見て知ったわけですが。ところが、私、洵子さんにここできょう初めてお目にかかるんでないん

です。すでに一度お目にかかるとるんです。どこでか。上海で。私、昭和一五〜一六年ごろに上海に行ったんです。私、一三年から終戦まで上海におったんです。ある日、上海のある広場で、そこを歩いていたとき、あの方のお母さんの芳子さんが——いや、芳子さんがというのはそのとき知らなんだ。私、京大の学生だったときに、女学生姿の芳子さんを見たことがある。それと、もう一度は、河上先生の送別会を楽友会館でしたときに、済んでから、河上さんの二本松のお屋敷までみんなで送っていったことがあるんです。そうすると、中から、芳子さんと秀夫人とが飛び出してきて、河上先生を中に入れた。我々は玄関まで送っておいて解散した。そのとき、芳子さんをちらっと……。二度お目にかかった。——二人小さいお嬢さんの手をつないで歩いておられた。あ、これは河上先生のお嬢さんだと思った。思ったけど、まさかあの当時、一六〜一七年ごろ、芳子さんが上海にお出になっておるといふようなことは考えななです、ひとつも。だから、世間にはよく似た人もおるもんだなと思うて、帰ってきて、やっと二〜三年前に全葉が出て、河上さんの日誌を見たら、そういうことがわかった。あ、あ、やっぱりあれは芳子さんだったなと思う。そのとき

には、今日お目にかかった芳子さんは小さいお嬢さんだった。私は、きょう来た意味があったと思って喜んでおります。(拍手)



田村敬男 順序をかえさしてもらって申しわけないんですが、どうしても全わなければならないお客さんが二時半にありますので、私失礼するので、ご挨拶かたがた河上先生の思い出を一言申し上げたいと思います。

立ってお話しすればいいんですが、私は足が全然だめなんです。重度障害一種二級で、とても……。長時間ですと、車椅子のご厄介にならなきやならん。きょうもお

墓にお参りしたくて階段のどこまで何とか行っただけで、あれを越えてお墓へ行ったら、もうここへ帰るわけに行かないと自分で判断しまして、途中でやむを得ず帰ってまいりました。

河上先生のことについては、これは前に一回お話ししたことがあると思うんですけど、河上先生が共産党に対するどういふ熱い思いを持っていたか。これを私は一番肌でよく知っているんです。あの天皇制の支配、特高警察の暴れておったあの時代に、ちょうど三・一五事件で谷口善太郎君が検挙され、それから病気で保釈になっておったわけですが、私どもは日本労働組合評議会史を残すためには、病気で今寝ているけども、谷口に書かす以外にはないじゃないかということで話をして、谷口原稿を書けと。磯村秀次（？）と僕が筆者になって身代りになると。君んとこへ診察に来るお医者さんの往診宛に原稿を入れてもらって、安田徳太郎先生がそのうちの一人ですが、私が安田先生のとこへ行って、その原稿をもらって、その晩に全部私の手で原稿を書きかえるんです。そして、その原稿を持って河上肇先生の二本松のお宅に行きまして、先生にお願ひしたんです。そのときは谷口君と先生とはそう密接な関係はなかったです。あ、労働者

の谷口君ですね。そうです。谷口に日本労働組合評議会史を書かせますが、筆者は私になります。先生には絶対に迷惑をかけませんが、社会問題研究にこれを掲載していただいて、谷口が飯を食うのに困ってますんで、すいませんが先生、原稿料を渡してやっていただけませんかというお話しなんです。共産党員が病氣保釈になって、その共産党員が原稿を書く。これがあれば直ちに保釈は取り消されます。同時に、その共産党員の書いた労働組合評議会史を自分の責任で編集して発行しておる社会問題研究に載せるということとは、これは共産党に対するシンパ活動として、あの当時は少なくとも懲役一年くらい、執行猶予三年くらいの判決は必ずおりました。そういう時代です。その時代に、私がお願ひしたら、先生は、ああ、わかりました、よろしい、そのとおりやりましょうということ、ついにこれはばれずじまいです。

こういう、つまり共産党に対して非常に純粋な気持ちで先生は持っていました。ところが、ある時期、つまり新党準備会のときに、大山先生と手を組んで、私ども青年と対立しました。非常に短い時間ですけど、それで先生にもう一通我々の陣営に戻っていただいた。そういう一つの思い出があります。

今鈴木君の話が出ましたが、一九五九年に中国の人民救済会のお招きで、日本国民救済会の代表団員として六人の一人として行きました。鈴木重雄君に北京大学で会いました。そのときにも、先生の思い出を少し鈴木君と話したんですけど、本当に先生は、己れに厳しく、そして我々に対して同志的な人間に対しての愛情というものが非常に深い方でした。口には出さないけど、行動でお示しになった。こういう先生でした。

その後、いろいろありますけども、私は河上先生より末川先生と一番長いんです。娘が先生の秘書を一年やって、先生のお仲人で結婚して、今前橋にいますが、ときどきその娘と話をすると、末川先生の思い出、そして末川先生の向こうにクローズアップして、私はどうしても河上先生の顔が浮かんできます。

そういう点、特に今度は京都大学の社研の諸君、大門君を初めそうですが、水田三喜男君とか宇都宮徳馬君、いわゆる白川会のメンバー、つまり京大に学ばない人間として二人か三人いると思うんですが、僕と長曽我部君と。そして、さつきから川勝君の話が出ますが、私は立命の社研の生き残りの老兵です。立命の社研は六人。今生き延びているのは川勝伝君と僕と二人です。そういう

ことの中で京都大学の諸君と一番深い交わりがありまして、野口はきょう来てませんけれども、野口から、ちょうど私が入院中に話が煮えまして、『京都帝國大学学生社会運動史』を私のせがれのとこで発行しようなわけです。ある意味ではあの本は河上先生の墓標だと思っています。京都大学の墓標でもあると同時に、河上先生の墓標だと思います。だから、河上会が京都大学でつまり締め出されている現状、まことに腹が立ってたまりません。京都大学は河上先生をもっと大事にすべきだし、河上先生こそが京都学派の代表的な先生だと私は思っております。

特に最後に皆さんをお願いしたいのは、スパイ防止法を、どうかひとみんなの体で心で抑止してほしいんです。あの法律ができて、一番末端の解釈でやられたら、我々の自由なんてものはひとたまりもなくやられてしまいます。だから、ことしの河上会はずいぶんスパイ防止法に対する反対の決議くらいはしてほしいと、こう思います。(拍手)これを先生の壁に手向けたいと思います。

現在、人生最後の仕事でやっているのは、新聞に大分出ましたからと存じだと思えますが、重度障害者多数雇用事業株式会社あすなろ、三〇〇〇万円の資本金の会社

ですが、それができて、その社長をやっております。その用事でこれから行きますので、大変どうも失礼いたしました。(拍手)



藤田 整 私の父、

敬三がこの会にずっとおりましたもので、その縁で五年ほど前から会員にさせていただいたものであります。も

ちろん河上先生と直接のご面識などはないんで、現代の話をいたしますけども、私は社会主義経済といえますか、ソ連経済の研究で大学で勉強した者です。

その話をちょっといたしますと、ことし八月に、大阪、それから北海道から一三人ぐらいの仲間で、ナホトカ、ハバロフスクでソ連のアカデミーの学者と一週間ほどシンポジウムをやってきました。私がソ連に行きましたのは、これで五回目です。社会主義というのは、言うまでもなく、河上先生が非常に関心を持っておられたというか、それを目指された社会です。ソ連社会というのはいろいろ複雑な問題がございます、直ちに我々の模範

とするものではないんですが、ご承知のように、ブレジネフの最後の沈黙時代というものを抜け、ゴルバチョフの登場によってやっとおみこじが上ってきたという感じが実際にいたしまして、私も非常に明るい希望を持ちました。いろいろありますけれども、経済の問題、それから特に国際問題では軍縮、特に核兵器廃絶に関しまして、ご承知のように五〇％核弾頭を減らすという提案も始めて、これはやはりゴルバチョフ個人のみならず、ゴルバチョフを支える特にソ連の五〇歳より若い世代というものは我々とはとんどセンスが変わらない、非常に話せる世代だということを改めて確信して帰ってきて、非常に明るい希望を持ってました。

もう一つだけお話しいたしますと、ウラジオストクという町が極東にございまして、これは軍港ということで外国人立ち入り禁止ということになっております。戦後、私の知る限り、あそこを訪れた外国人というのは、一〇年ほど前に元アメリカ大統領ニクソンがあそこでブレジネフと会談した。それ以外には正式にはおらんはずでございますが、その軍港を外国人が立ち入りができるように、つまりオープンといいますけれども、開くということとを真剣に考えていると向こうの相当上の責任者が我々

に話してくれました。そういうことであれば、これは西太平洋における平和のジュエスチャーとして非常に重要な意味があるから、ぜひそういうことをやってほしいと我々も希望を申ししてきましたけれども、うまくいけば一年ぐらいのうちに何とか片がつくんじやないかと思いましたが、我々としても大いに期待して待つておるということです。そういうことをちよっとご紹介いたします。（拍手）



一海知義 神戸から

来ました。河上さんの全集の編集の仕事を手伝っております。私の専門は中国文学なんです、いつの間にかお

手伝いすることになって、ちょうど八年目になります。

いよいよ全集も最後に来まして、きのうの晩、最後の巻の自叙伝の三冊目の再校のゲラ刷りの校正を最後のページまで済ませて、きょう来たわけで、あとまだ索引がついたりしますので問題ありますが、いよいよ一二月に多分全三五冊が完結するだろうということです。全体は三

六冊になってまして、別巻というのがつくことになっている。それにいろんなものが入るんですが、特に非常に細かな詳しい年譜がつくことになってまして、岩波の編集部の方で今原稿をつくっておられる。その一部を、私きょうここへ来る電車の中で読みながら来たような次第で、それは来年になって出ると思うんです。

全集とは関係ないんですけども、河上さんと奥さんの秀さんとの間の往復書簡が本になる企画が岩波の方で立てられています。多分それも来年には出るんじゃないかと思っています。

それにしても長かった全集もいよいよ来年で全部終わると。ちょうど来年は、河上さんが亡くなられて四〇周年に当たるわけですね。敗戦の明くる年の一月三〇日に亡くなられましたので。四〇周年を記念して、何かの行事が行われたらいいなあと私は思っているんですが、ぜひ記念会の方でアンケートでもとられて、皆さんのお知恵を集められて、いい企画がされるように期待したいと思っています。

どうもありがとうございました。（拍手）

井上喜代松 兵庫県西宮市に居住しております。会員



歴はそう古くはないんでございます。私は大體労働者出身なんで、先生の教えを受けたということはございせん。ちょうど二〇歳ご

ろに先ほどなたがおっしゃった改造社の全集が出まして、『経済学大綱』とか『マルクス主義経済学の基礎理論』とか、そういうのは読ませてもらって、先生に親しみを覚えたという次第なんです。

私の義兄はちょうど吉田に住んでおりまして、もう今はおりませんけど、河上先生のお宅とは出入りがありましたんで、間接な関係はございましたです。先ほども四〇周年云々とおっしゃったですけど、当時四条大宮西のところにお寺があつて、ちょうど一月三〇日に集会がございまして、先生の病状が悪いというのを聞かされたことをよく記憶しております。

話は変わりますけれども、先ほど国家機密法というようなことを申されましたですけども、もし治安維持法がなくて平和な時代でございましたら、先生の学業というものはうんと発展して、思う存分なされたこと。健

康も、もちろんあんなことでなくして、もっと栄誉もたられ、長生きされたと思うんです。ところが、ご承知のように、そうした悪い状態が今またまに起ころうとしておるといふことなんでございますね。けさの新聞を見ますと、東京で平和構想懇談会と宇都宮さんなんかも座長でおられます二二人委員会というのが会合を開いておられます。それには別に触れませんが、そうした情勢でございまして、もう河上先生が入獄される前のような時代は再び来させないように、お互いに努力をいたしたいと、かように……。私、八〇にはまだちょっと間がありますけど、もうそれに近いような年齢なんですがお互いにひとつ年寄り並みにひとつ努力をしていきたいと思ひまして、挨拶がわりでございしますが……。

(拍手)



小林義治 大分失礼しておりましたが、久しぶりできょう出席させていただきました。河上先生との接触というのは、もう私六〇

年ほど前、私の二〇歳のとき、ごく短期間ですけども、私はよく知っているんだけど、先生は多分あんまりと存じなかったと思うんですよ。その六〇年ほど前、昭和二年ですけども、それからずっと戦争の期間があつて、終戦後、非常に先生が困っておられるということを伝え聞きまして、これ何とかせないかんぞということで、友達と二人である食料品を自転車の後ろに積んで、先生のお宅に放り込んでいったんです。で、逃げるように帰ったわけですけども、我々自身は自分の気持ちはそれで満足した。その後、終戦直後ですから、いろんな情勢の中でそういうことは頭からすっかり消えていた。それは、一二月の初旬だったんですけど、一二月二二日でしたか、二〇日はどたつてから、先生から封書が来たわけです。開けてみたら、お礼のお手紙なんです。中で、今まで忘れずにいてくださったことだけでもかたじけないと。しかも、今自分は貧窮の極にあつて、讀書を書くにしても一週間以上かかるんやと。早速お礼申し上げるべきところ、きょうまで失礼していた、というようなことがいろいろ書いてありまして、私もそれを見て、ほんまに先生の誠実さには心を打たれたんです。河上先生の一生というのは、学問の中でもそうですけど、人間的にも誠実

というのを貫いておられる。すべてね。そういうことで、最近河上全編を取りまして、目録をずっと見てみたら、きちんと書いてあるんですよ。一二月二三日のことをきちんと書いてある（全編二三巻七一四頁、同二八巻四八七―四八頁）。ほんまに誠実な方だなということを本当に今肝に銘じて思っております。

以上、お話し申し上げて、終わりたいと思います。
（拍手）



塩田庄兵衛

きょうのメインイベントはたしか松尾先生の講演だと思んですが、始まるころには多分日が暮れるんじゃないかという気がいたします。皆さんが大変感銘の深い話を伺って、これはこれとして貴重なんです、私はごく簡単に事務的な報告を申し上げます。

その前に、さっき大門さんが言いかけて途中でな

ってしまったんですが、運転手さんの安井さんが亡くなられて、大門さんと二人でお葬式に行ったんですが、実にこの会にとっても残念なことをしたと思いますので、改めて追悼の気持ちを捧げたいと存じます。

毎年、この河上肇記念会の別動隊としての河上肇音楽会の報告をさせていただいておりますので、最近の状況を簡単に報告いたします。音楽会の方はこの春こちらにいらっしゃる岩国出身の沖本さんのご案内で河上先生の生家を訪問する三〇数名の団体旅行をいたしました。

このことは会報に沖本さんが書いてくださったので、内容は重ねて申しません。それから、去年は、たしか私が杉原先生その他の方のご協力で編集いたしました『河上肇自叙伝の世界』という書物の宣伝をした記憶がありますが、それは法律文化社から予定どおり発行されました、かなりよく読まれているようでございます。読部僅少で、沖本さんがきょうお持ちくださっていますから、興味のある方にはお分けできると存じます。

本年度は、音楽会の第六期に入っておりますので、このチラシは皆さんのところへ多分届いておりますし、それが余分にまた入り口に置いてありますし、沖本さんにも持ってきていただいておりますので、ごらんいただきました

と思います。最初杉原先生から『河上肇自叙伝を読む』というタイトルで読み方についての手引きをしていただきました。そして一〇月までまいりましたが、来月は先ほどからお名前が出ております川勝伝さんに来ていただいて、戦後の経済界に生きてというテーマでお話を伺います。というのは、先ほど一海さんがおっしゃいましたように、来年の一月三〇日が河上先生の四〇周年のご命日ですから、河上肇没後四〇周年記念ということで、自叙伝と戦後四〇年——私たちの自叙伝を国民の一人としての自叙伝を考えてみようじゃないかということ、川勝さんには財界人としての話を伺う。その次の月、一二月には劇作家の木下順二さんに来てもらって、『私と戦後』というテーマで、来年の七月までそういう調子で、寿臣章子さんとか、そういう人たちにずっと続けてもらう。そういう催しをやっておりますので、どうぞ周辺の若い方々にチラシをお持ち帰りいただいて、お知らせいただければありがたいと存じます。

きょうは、この程度にいたしておきます。(拍手)

山田新三郎 私は昭和三年に京都大学経済学部に入りまして、ちょうどその年の三月に河上事件が起こりました



た。私は、河上先生の講義を聞くために京都大学の経済学部に入っただけですけれども、講義は聞くことはできなかった。その後、一月に

一週ぐらい私は先生の自宅にお伺いしまして、直接先生の聲に接して大変幸せなことだと今考えております。あんまり学問の方はなにしてはしたけれども、私の人生にとって河上先生のご人格が大変大きな影響を及ぼしたと思います。

昭和三年、河上事件が起きます前には、三・一五事件がありまして、学生運動は熾盛状態になったわけですが、宇都宮徳馬とか、私の実兄でございます大門英太郎が中心になりまして、学生運動の再建をやったわけでございます。大変苦難な時代でございます。宇都宮も大門英太郎もとうとう学校は卒業せずに牢獄に行ったというようなことでございます。

先ほど土居さんがちよっとおっしゃいました河上先生の学生会館における送別会でございますけれども、これはあんまり河上先生の記録にはないんでございます。昭

和四年のことだと思っております。これは河上先生が大山郁夫先生と一緒に書齋を出て実地運動をやるということでございます。そのとき、間もなく先生はどうかで立候補されたと思います。我々社会運動をやっております学生一同は、実は先生が大山さんと一緒にやられることについては反対でありまして、先生にも申し入れたんですけれども、先生は絶対お聞きにならずに、実際に大山先生と分懸をやりになると。それなら、先生の送別会をやりやないかということで、学生会館で我々学生が寄りまして、先生の送別会をしたわけでございます。会が終わりましたから、先ほど土居さんがおっしゃるように、我々先生をお宅まで送っていったわけですが、そのとき私は末川先生と一緒に歩いておって、先生とどういってお話をしたか、ちよっと今は記憶にはございませんけれども、皆さんと一緒に先生をお宅まで送っていった記憶がございます。

先生の送別会は、そういうふうに大山先生と実地運動をなさるということに対しての先生の送別会をしたわけでございます。我々学生は、先生は先生として『資本論』の翻訳、その他書齋におられても学問的に十分貢献できるじゃないかという考えでございます。先生のそうい

う活動に実は反対をしようとたわけてございます。大変悔しいことであつたかと思いますが、そういうことがございましたんで、ひとつお話し申し上げまして、私の責任を全うしたいと思います。

どうもありがとうございました。(拍手)



山下 肇 氏

様の大変いいお話を承っておりまして、私の番が回ってきましたが、私は自己紹介、まことにお恥ずかしいよ

うな次第でございます。最初に申し上げますと、きょうこの会にお出にならない山下孝次郎さんの代理だということで自己紹介させていただきます。私も同じ山下と申しまして、山下肇と申します。しかも、まことに場違いで東京の生まれでございます。関西大学へまいりましたから五年目になります。先ほどのお話にもありましたけども、東京も私は目黒ではなくて目黒のうまれでござ

います。その辺は目黒のサンマの方なんで、どこへ行っても目黒のサンマみたいな感じがするんですけども、きょう最初にご法事のときに方丈さんからお話ありました浄土宗は私も檀家の一人でございます。東京の目黒にある菩提寺ですが、これは例の作家の武田泰淳氏の寺で、墓がございます。武田さんに子供のおかげから可愛がられて育ったという人間でございます。

こちらへまいりましてからようやく五年ほどになりました、何やら関西での市民権が与えられたようなことなんでしょうか。このところ、朝日新聞で紙面批評その他をちよく書かされておりました、きょうお目にかけた皆様方からも、今朝の新聞でもお前のめろめろしたのを見たというお言葉をいただきましたが、関西大学に来たのは、私が阪神ファンであつたということも一つにはあるわけです。それでついに優勝したという、そのめろめろが本日の私の原稿にもあらわれておりますけれども、しかし、それもさることながら、私が一番関西に来たいと思っております、かねてからの念願だったのは、やはりこの法然院の河上先生の会に出さしていただきたいということが第一でございます、それは長年聞けたつみの声の「わたつみ会」という会をやってお

りまして、木川先生からはもう一方ならぬお世話になった様でございます。

この会の中では文学関係の方は一海さんぐらいでしょう。私は一海さんよりさらに一層文弱の徒でございますので、お騒がせしいんですけども、ドイツ文学をやっております。実はきょうはこの席で和田洋一先生と一緒になるつもりでありました。ところが、和田さんの方は教会のご用事があってお出になれない。しかも、私にはどうしても先生の方から会いたいんだと、京都へ来るなら、ぜひ会いたいんだから、四時過ぎにはどこそで待っているという話なんでも、もともとと珍らくこの会は続くんだと思いますけれども、途中で勝手ながら失礼させていただくかもしれません。その辺、まことに残念でございますけれども。

五年もたちますと、大門さん初めいろんな方々からお声もかけていただいて親しくさせていただくというありがたいご縁ができてまいりまして、たまたま昨年は京都の西陣の出身で戦時中にまだ三〇にも満たないで亡くなった天才的な映画監督のお墓が七本松の方にありまして、そこで昨年から山中貞雄君というのが始まりました。昨年は、ちょうどきょうの最初の大門さんのお話にもあり

ましたように、次々と身近な者が亡くなっていくというようなことが私の周辺にもありまして、昨年は先輩が一人亡くなって、その葬儀委員長をやらされて、ふうふう暑い中を東京で立ち回っておりました。その上にこの山中君にも出たりいたしまして、九月の末になったらおっ倒れて、とうとうこちらの席には出られなかったというまことに申しわけない、昨年は残念をいたしました。特に川勝さんのお話を承りたいと思っておりましたのに、それもかないませんで、残念だった次第でございます。

山中貞雄君の方も、昨年私の隣の席におった加藤泰監督、これは山中貞雄の甥になる人ですけれども、この人が最後の遺稿のような形で頑張って書いた『山中貞雄伝』というりっぱな本がようやくこのほど出ました。その本ができる直前に加藤監督の方は亡くなりまして、この会の会ではお会いできませんでした。そういうこともありまして、また昨日は、私の一機の知友でもあった経済学者の玉野井芳郎さん、あの人も山口県出身なんです。彼の訃報が新聞に報道されまして、びっくりして電報を打ったりした次第でございます。

きょうは、そんなわけで、私の河上先生とのご縁ということはほとんど語るに値することないんでございます

けれども、ただ一つ、自己紹介兼ねて申しますと、私の名前が筆でございまして、名字が山下なんです。河上先生と親戚みたいな名前なのでございます。これが最高の、私の生涯の誇りであるということでございまして、子供のときからそういうわけで、そのご縁をこの前全集の月報などにもはなはだお恥かしいものを書かせていただきました。その河上ならぬ山下筆でございしますので、ひとつよろしく願いたします。

つまらんことばかり申し上げますけれども、私は文弱の徒とよく言っていますのはどういふことかと言うと、例えば京都と申しますと、祇園というところがありまして、その祇園で出している雑誌が、はなはだ色っぽい、しかしなかなか品格のあるこういふきれいな雑誌がございます。ご存じかどうか知りませんが、私の場合、どういふわけですか、これにときどき書けということがありまして、「祇園」にもう何度も書かされておるんです。つい二―三日前に届いた今月最新号にもたまたま書かされたときに、私はどうも祇園というのはあんまり知らないわけで、書く材料がないわけなんですけれども、私としてはまず書きたかったのは、河上先生のお書きになった戦時下の日記の中から、京都を称える詩がありました。

その詩をこの文章の中へ引用させていただきました。それをこの席の一つのお慰みということで最後に朗読させていただきます。自己紹介にかえさせていただきたいと思っています。これは昭和一七年の三月二十五日でございますけれども、京の魅力を称えてやまない河上先生の日記の一節でございます。また来ませ 命短き人の世の命短

き春なれば 我が住む京は鶯の鳴く音も高き都なり

蒼麗しき都なり 春たけていざよう緑に散る花の清らに
匂う都なり きょう見れば桜は既に微笑めり 咲き映え
ん日も近からん君をも待たでその花の散らまくおしも

(拍手)



山崎宗太郎 奈良県

の信貴山の麓から参りました。佳谷悦治先生のご紹介をいただきましてこの会に参りましたのが病みつきになり

まして、その後ずっと参上いたしておるのでありますが、この法然院の境内に入りまして、お墓にお参りいたしますと、心のあらわれるような感じがいたしました。毎

年この日を楽しみにいたしておるのでございます。

河上先生には直接教えを受けたことはございません。

ただ、私は青年のころに大原社会問題研究所に学んだことがあります。あの研究所の創立には河上先生も多少のご協力をなされたようにございます。また、その研究所の高野岩三郎、森戸辰男、大内兵衛、柳田民藏、笠信太郎なんていう先生方に教えをいただきましたが、それらの先生方、いずれも河上先生に敬意を持っておいでになりましたことを思い出します。したがって、私は間接的な孫弟子のような存在かもしれません。

河上先生の著書やら、お書きになりましたものをいろいろ拝見いたしまして感じますことは、やはり真摯誠実なる態度であると思います。あれを私も学びたいと思っております。ことに求道者の姿を私は河上先生に見るのでありまして、先ほどもご住職からお話ございましたけれども、努力精進ということを中心に銘じて、先生のあの真摯誠実なる態度を私も学びつつ精進をしてまいりたいと思っておる次第でございます。

ありがとうございます。（拍手）

広岡正次 大阪で古本屋を営んでおります。いろいろ



皆様ありがとうございます。
ございました。
簡単にござい
ますが……。

（拍手）



北原 運 此
の出席者名簿に
だれも読めない
字があります。

一四番北原というんですけども、この名はいまだかつてだれも読んでくれたことがない。つけてくれた大先生があるそうだから仕方ない。これをスグレというんです。レでなくちやいけないんだそうです。

それはともかくとして、私は先生に両方教わってしまっ
て、前にお話ししたことありましたけれども、仙台の
高等学校で教わった戸張竹風という先生があらまして、
この戸張竹風先生は山口の高等学校で河上先生を教えた
んだそうですけれども、この話をするとき余り感心したこ
とを言わない。なぜ言わないかというと、それは酒とま
んじゅうとの相剋じやないかと思うね。とにかく河上先

生は甘いものが好きだし、戸張先生は酒の方が好きで、おまえ、仙台から京都へ行くなら、河上という男がいるから挨拶に行けと。普通のようなら一本下げて河上先生のお宅へ行ったら、河上先生は妙な顔をされたことがありました。

それはちょっとふざけた話になってしまいうけど、言いますと、河上先生は生徒がほかにいたけれども、『資本論』を訳そうじゃないかと。訳そうというまではいかなかったけど、やろうじゃないかという話があって、その原本をどうするかといったら、おれが貸してやるよといって貸してくれたんです。それが京都大学の図書館の刊の押してある皮つき版で、それを私が責任者みたいになって借りておいて、そのうちに先生もそれからちょっと離れて、どっちかというところの方へ入ってしまう。僕の方はしゅっちゅう川端警察へごやかいかいになっちゃって、とうとうそれがものになるところでなかったわけです。ということは、私自身外国に追い出されて何年もいたようなわけで、河上先生が巣鴨へ入ったとかいうようなことを送ってきた新聞なんかで知ってるだけで、それですっかりご無沙汰してしまっていたわけです。

しかし、河上先生があれば甘いものが好きだという

のは、うっけ者というか、気がつかなくて、本当に仙台から一緒に行った菅原が日記を読んでもと、非常に苦労して、努力して先生のところへときどき差し上げていたということを知って、まことに申しわけないことをしてしまった。いまだにそういう悔いを持っております。終わり。(拍手)



沖本 彰 豊屋川か

ら参りました。ただいま塩田先生がおっしゃいましたように、岩園の出身でございます、本家の方が河上先生がお生まれになったところと二〇〇メートルのところにありまして、もちろんそういうことを知ったのは戦後でございますけれども、そういうことで非常に河上先生を親しみを感じているわけです。自叙伝の中に出てきます幼年時代の景色なんか、私ももちろん見てきましたんで、そういう点でも非常に親しみを覚えまして、学生時代に自叙伝を読みまして、それからいろいろ著作を読ませていただいております。

現在は塩田先生を代表世話人として、河上肇書談会というのをやっております。私も会計をやっておりますけれども、一応世話人と。そういうことで、若い人の間に河上精神を伝えていきたいというふうに思っております。

宣伝させていただきますけれども、さっき塩田先生がおっしゃいましたように、「自叙伝の世界」。杉原先生、一海先生にも書いていただいておりますけれども、これを一九〇〇円で持ってきておりますので、お帰りの際にぜひお求め願いたいと思います。今後ともよろしくお願いたします。（拍手）

白石美智子 初めて参加させていただきました。私は直接河上先生を存じ上げませんし、学問の世界とも縁遠いところにおりまして、ほととの庶民でございます。ですが、私、小学校の四年生ころから、父と友人の会話の中に河上肇という言葉がしきりに出てくるのを不思議な感じで聞いておりました。ところが、成人しまして後、夫でありました白石凡と出会いまして、そこでまた河上肇という大先生のお話を聞き、ああ、あのとき父が話してた河上肇という方のことなんだと初めて理解するよ



うになりました。私は、主人に勧められて、河上肇の自叙伝から読み始めましたけれども、とても深い感動を受けまして、夫凡の解説もありましたものですから、より深く理解し得たものと思っております。ですが、果たして、私はそれを実践したかどうかといまだに疑問を持っております。主人も亡くなりましたが、主人が話してくれた河上先生のことをもう一回自分の中で反芻して、これからの人生を正しく生きていきたいなと思っております。

これからも参加させていただきたいと存じます。どう

ぜひよろしくお願いいたします。(拍手)



麻生正子 福岡から参りました麻生泰一、主人と私正子でございます。

河上先生のご人格を追慕いたしまして、自分たちで一年に京都に来れる機会がございましたときにお墓参りをいたしておりました。その折りにお誘いを受けまして会に出席させていただくようになりました。

この会に参りますと、一海先生や杉原先生などいろいろの先生方の大変感銘深いお話を伺い得ますし、これからの毎日を生きていく上に支えにしております。主人にかわりまして……私、主人を誘いましてこの会に来るようになりまして、私の方が積極的なものですから、お

しゃべりいたしました。失礼いたしました。(拍手)



佐藤克己(当日お話したことで十分意味が伝わらないと、改めて原稿を送られてきましたので本誌に別に掲載することになりました)



片山卓二 姫路から参りました。先ほどから皆さん方の非常にありがたい有意義なお話を承って、本当にありがとうございます。秋

法然院にやってきました、河上先生の墓前にお参りするところを毎年心待ちにしておる一人であります。

先ほど国家機密法絶対反対というお話がございましたが、そのとおりでございまして、これはぜひ阻止してしまわなきゃいかん。絶対にこれは許すことができないということを私も申し上げます。



それから、最近の会報に、私もちょっと書いておるんですが、京都の宗教者の細井先生が核兵器全面禁止、廃絶の署名運動について一言述べられております。私もちよっと考え直しまして、もうやめようかと思っただけですけれども、実は二月に広島、長崎でのいわゆる国際署名の用紙を持ってまいりました。これに、時間がございましたので、署名と住所、できましたら若干のカンパを、袋を後ろにつけておりますのでやっていただければ非常に結構だと思います。私、現在、姫路の医療生活協同組合に若干関係しております。それから、最近国民救済会の仕事も若干手伝っております。簡単にですが、これをお返ししますので、できましたらひとつご署名をお願いいたします。

どうもありがとうございます。(拍手)

大塚設男 私も姫路から参りました。たしか第一回だったと思うんですけど、四八年からずっと出席させていただいて、ここ二、三



年とぎれておりましたが、河上肇先生の自叙伝の愛読者ということだけでも、熱烈なファンであります。どうぞよろしく願います。(拍手)

井関安治 私は豊中に住んでおって、弁護士をしており当年八五歳。大正一四年に京都大学法学部を卒業したので、ご出席各位のうちでは恐らく高齢の方であろうと思います。

私は、大正一二年に河上肇先生の「経済原論」を聞いたのであります。河上先生は経済学部の教授でありましたが、当時経済原論が法学部の選択科目でありまして、経済学部から一年のときには神戸正雄先生、二年のときには河上肇先生、三年のときには小川郷太郎先生が経済原論を教えたのであります。その上、河上先生は京大講演部の部長をしておられました。そのときに私は講演部の部員でありまして、河上先生がその後行動をとみにされる早大教授の大山郁夫先生を呼ばれて講演会を開かれたこともあります。また、講演会その他の打ち合わせ

せに私が河上先生のお宅にお伺いしたこともあります。ほとんど和服で大学へ通うておられました。非常に神経の繊細なお方でありまして、人のことに対しては非常に気配りをされる方でありました。

河上先生はマルキストになられましたけれども、要するに大きな意味でヒューマニストであると私は思いました。したがって、ヒューマニズムは人類の幸福を願うものでありますから、今日、日本の国がやや右傾の方向に向いておるのときに当たって、河上精神を皆さんとともに大いに考えていきたいと、かように私は思うのであります。

そこで、皆さんのうちで河上全集を持ちたいけれども注文しそこねたというお方がありましたら、幸い私はきのう、河原町四条上ルの丸善の京都店の古本即売会に行きました。二日までありますが、河上肇全集がそこに出ておりますので、皆さんのうちでもし欲しいという方がありましたら、これは恐らく七時ごろまでやっておると思いますから、帰りにお行きになりましたら、一部だけですが、入手できます。このこともお知らせします。

最後に、本会は東京の会のように世話役が多くなって、

主として大門英太郎君が一人で賄うておるのであります。ついては、皆さんのうちで何とか大門君の跡取りをやるという方があったら進んで申し出ていただきたいし、自分はやれんけれども、かわりにやる人があるという者を見つけてくださったら、ぜひ大門君の方へ推奨しないと、大門君もすでに高齢でありますから、この上大門君の手を煩わすことはまことに恐縮と存じます。これだけ申し上げます。（拍手）

（松尾先生講演、先号掲載）



内海軍一郎 今お話を承っていると、お話の中に出てくる人はみんな私と個人的に接触あった人ばかりです。

河上先生には一度しかお目にかかったことないんですが、高等学校二年のときに高田の馬場のおうちへお邪魔した。何しに行ったかといったら、金もらいに行っただけです。たかりに行った。そのとき、私は全国農民組合の財政部員でしたから。京大へご厄介になる前に河上先生に三度ばかりお金を一五円ずついただいて、三度目に行ったら河上先生が地下に潜られてしまったんで、それから後は存じません。

私は、京都へ来て嵯川の世話になって、今嵯川統計学研究所というものを看板だけかけて嵯川の論文集を刊行しております。これも京都でやりにならないから、私が引き受けた。

さっきお話になった滝川事件五〇周年記念というのは、実は正月の年賀状に私が書いて方々に呼びかけまして、皆さんが動いてくださった。京都じゃそういうことをやる人がなかったというのは実に残念ですが、戦後に学生と喧嘩しちゃってますんで、滝川さんを糾弾して殴ったか何かしたような連中が滝川のをやろうって、東京でやったんですね。大島渚の一派が事務局をやった。

一つだけ、嵯川と河上先生の関係について。嵯川という男は大変礼儀のやかましい男でして、箸の上げ下ろしから茶の飲み方まで文句言うんだ。民主主義何とかの政治家になったら、ニコニコつくり笑いばかりしてやがって、我々には赤くなったり青くなったりして、「何だ、おれがまだ腰かけないうちになぜおまえは腰かける」と、まあ封建制の権化みたい。私は実は怒鳴られたんですよ。私はビリから一番で学校出て、どうするかというんで、もっと勉強したいと言ったら、よしといって、ありがたいう話で、ビリから一番を副手にしていただいた。日出新聞の世話になりました。来月の景気はどうなるかという原稿を毎日書いていた。それで飯を食いながら、無給副手をやっておりました。そしたら、あるとき、私より先輩の前田さんという副手が、先生がおまえを呼んでるよと言う。行ってみしたら、真赤になって怒ってるんですね。何を怒っているのかわからない。「おまえはさっき小使さんがおまえにお辞儀をしたときどうしたか」「私もお辞儀しました」「あれはお辞儀か、ああいうのは頭でしゃくと言うんだ。河上先生は小使さんに最敬礼したぞ」。一時間ぐらいしほられた。それから、私はしょうがないから、小使さんでも何でも最敬礼。(笑)

これでおしまいでございます。(拍手)



杉原四郎 私

も毎年この一〇月の中ごろに法然院で皆様にお目にかかることが出来るのを本当に楽しみにしております。私が代表世話人になりましてから、

ときにはしぐれることがありましたけれども、朝から雨だということはまだ一度もなく、大体今日のようによいお天気がこの日には続いておるように思います。今日も朝から多数皆様のご参会を得まして、意義深い一日を送ることができました。本当にありがたいと思っております。

スパイ防止法のお話も出まして、皆様から時勢を憂れる切実なお声もいただきました。確かに今こそもう一度河上肇の人と思想というものを改めてかみしめるとき

であらうかと存じます。この会も年を重ねまして、来年からはさらに年に一度ということではなくて、できればもう一回ぐらいいは河上について勉強したいということを思っております。また、この一月には山口で地方の方々がお集まりになって、河上を記念する会を企てておられるようでございます。その日にはぜひ出てこいと私の方にもご連絡がございますので、またそういう機会には河上の郷土に参りまして、そういう熱心な方々とお会いできることを楽しみにしております。

一海さんがおっしゃいましたように、全集もやっとあとわずかということにまでこぎつきました。これも皆様方の長い間のご声援の結果だと感謝しております。来年の一〇月には河上全集も終わり、河上没後四〇周年の何らかの記念の事業も終わっていると思いますけれども、この会は一層さらに皆様との親睦を深めながら、この厳しい世の中に河上精神を生かしていくことをお互いに語る会というふうにしてまいりたいと存じております。

きょうは長い間ありがとうございました。(拍手)

河上博士における「陽明学」と「タオ自然学」

佐藤克己

スウェーデンの湖沼では魚が既に絶滅してしまった。イギリスやドイツからの排気ガスが気流に乗って流れてくるからである。また西ドイツの森林の過半は「酸性の雨」のために枯死せんとしている。これまた「排気ガス」のためである。また二一世紀の三〇年代には「排気ガス」のために地球上の平均温度は五、六度上昇し、海面も數十センチ上昇するだろうと予測されている。それ以上に恐るべきことは排気ガスによる「酸素の欠乏」である。それは「人類始め生きとし生けるもの」の「絶滅」を意味する。植物生態学の吉良竜夫博士は「快適を求める人間の本能がなくなると限り人間の滅亡は不可避である」と、このほんの一、二行の文章は数百ページにわたる全文章のうち最も重大な意味をもって、今もなを私に追ってくるのです。この本能をなくすことは容易には出来難いが、「価値目的の重点」を他に移すことは可能である。

「人欲を去りて天理に就く」というのは「陽明学」の「第一綱領」(四言教の一つ)ですが、河上先生の「無我愛」も、「人欲を去る」という点において陽明学と共通するものがあります。後段の「天理」にいたっては人知の進むに従って表現形式は千差万別、幾変転するであろうが、その「根本知」は仏教で説く「般若知」即ち「無明」であり、「無無明」とは「分別」しないことであり、「分別知」とは「分析知」であり、西洋の科学文明は、この「分析知」を基礎にしたものであり、「客体認識」にとっては不可欠のものであり、これによって物質文明は進歩してきたものであるが、しかし、科学は所詮「手段原理」であり、「人間中心主義」の「西洋ヒューマニズム」と結びつくとき、「自然征服」から「自然破壊」に到るのは当然のことであり、やがては資源獲得のために、海底まで掘り崩して「地球破壊」に進まざるを

得ない。

「仏教」では「分別(分析知)」するから「無明(無知)」に陥るという。それは「無明」即ち「根本知」を欠いているからだという。事々物々 万象の「真如」(あるがまま)は「分別」しない「根本知」(陽明学では良知)によって知り得るものであり、「大日如来」は「真如」の根源であり、私見では「真如」をノエシスから見れば、「主體的真理」であり「唯」心論となり、ノエマから見れば「客観的真理」であり、「唯」物論となる。唯心論も唯物論も「唯」とするは独断であり、「心論」であり、「物論」でなければならぬ。窮極の拠点は「真如」であり、唯心論も唯物論も「唯」を撤去して成り立つ「半面の真実」「半面の真理」である。

ところで、ここに大きな問題があります。真理そのものが、我々に説教するはずがないではないか、という問題です。いわゆる「法身は説法せず」というのが、仏教界の常識だったわけです。この常識を破って「法身は説法する」と説かれたのが空海の偉大なところですね。大もネコも、すべて「法身」であるが、我々に、それを受容する力がないために、説法が聞き取れないだけです。大やネコでも、大日如来が、そういう形で、我々に何か真

理を伝えようとして出てきているのだという考え方、これを「等流法身」と言います。そういう「法身の説法」を受け取るだけの宗教的境地に達するならば、木々をそよがす風の音でも、小川のせせらぎを聞いても、それによって真理を悟ることができるのである。「無我愛」の思想に没入した前後の河上先生の宗教的境地を、当時の著名な知識人たちが、随分軽視した言葉で批判しているが、それは河上先生の方的な、宗教的な「ひらめき」を理解できないだけであって、批判者たちの、浅薄な、私の言う「形而下的合理主義」の低劣さを示す以外の何ものでもない。「形而下的合理主義」では、「理論物理学」の最先端に行く、カブラの「タオ自然学」など理解できないはずもない。

この短編で「タオ自然学」の内容など紹介すべくもないが、カブラ教授たちのグループは知識や合理性だけでは限界があって、「老子」の「道」の思想や、仏教や「易经」など東洋神秘思想に学ばなければならぬし、「理論物理学」の到達点と「老子」の「道」の思想が、ほぼ一致するところにある。私見を加えると、どうしても「科学哲学」になってしまうが、「西洋的合理主義」では、もはや窮極的な「科学的真理」は捉え得ない。トインビ

「のキリスト教と仏教」という、あまり世間に知られていない「小書」にしても、「仏教」を「神秘思想」として捉え、仏教ぐらい「智慧の極限」を示した科学的真理であることを、なかなか理解しようとしなない。もっと精確に言うならば「科学的真理」は「胎藏界の真理」であって「金剛界の真実」（私の言葉で言うならば）「真理」は客体的ものであり、それを追求対象とするのが「科学」であり、「真実」は主體的、人格的なものであり、それを追求対象とするのが「学問」である」と裏と表との関係にあつて、その根源をなすものが「真如」で、「真如」を体得した人格的象徴が「大日如来」である。「如来」とは（Tatha-Gata 真如（Tatha）から来た（Gata 来））人々を金き人である。カブラは「老子」との結び付きを強調しているが、仏教には、ほとんど言及していない。私見としては仏教にまで到達しなければ、その宇宙理解は全きを得ないと断言せざるを得ない。

さて「老子」について言及しなければならぬが、一九七三年一月長沙の馬王堆^{馬王堆}の三号墓から発見された帛本の「老子」は現行本と二、三異っているが、内容には、それほど影響はないものと思う。「老子」についても、かなり深く思索してきているので、詳述したい誘惑に駆

られるが「タオ自然学」と河上先生の「現在の信念」に関連のある限り（河上先生は主として熊沢蕃山の言葉を引用し、その他老子の片言隻句を羅列していて、思想的脈絡がハッキリしないが、言わんとしていて語り得ていない熱情に打たれる。

「老子」五千数百言の冒頭に出てくるのが有名な「道」についての言説である。カブラもこの点を強調しているので、簡単に言及して、この雑談を終えたい。「知る者は言はず、言う者は知らず」だからである。さて「老子」冒頭の文句は次ぎの通りである。

「道の道とすべきは常の道にあらず。名の名とすべきは常の名にあらず。

名無し、天地の始めには。名有り、万物の母にこそ。

故に常無は以って、その妙を觀んとし、常有は以って、その奇を觀んとす。

この兩者同じきより出でて名を異にす。

同じきもの、是を玄という。玄のまた玄。衆妙の門。」

ここでの「道」は儒教の道だの、人間の道とは全く異なる。名付くれば、それは「限定」されることを意味するので、

限定されることのない「道」は「無名」「無形」である。

「天地」を生む、一種の「はたらき」を指している。天地の生ずる始めには「名無し」つまり「限定されて出て来る有」はないが、天地が生じ、天地から万物が生ずると、「名無し」つまり「限定された有」が生ずる。天地から「万物」が生ずる「はたらき」もまた「道」の仕業である。「常無」というのは「道」を体得した私見によれば「無無明」「根本知」「般若知」を持った「如来」である。そのような「道」を体得した「常無」にして始めて「道」の「絶妙のはたらき」を觀んとするが、「常有」つまり世俗の人、私見によれば「形而下の合理主義」に捉われている科学者たちも「世俗の人」である。そのような「道」を体得できない世俗的科学者では、もはや「科学的真理」も捉え得ないからこそカブラ教授たちは、分化した「自然科学」でなく「タオ（道）自然学」に拠るべきことを主張し出したのである。次ぎに進んで「常有」つまり「世俗の人」(Man of the World)の論議の

末梢つまり「分析論理による分別」→科学的分析と解してよいしか見えない。合理性を追求して「事社会」を現出せしめ「排気ガス」と「酸欠」の「不合理」に

苦しんでいるようなものである。

「この両者」即ち「天地」と「万物」は「同じき」「道」より出て、「名を異にす」つまり「限定された有」となる。「天地」と「万物」の根源である「道」は「玄のまた玄」「玄」とは「黒いもの、奥深いもの」「幽幻で絶妙のはたらき」であり、「衆妙の門」即ち「万物」の生まれ出て来るところである。

最後に河上先生の「片言」を引用して、この稿を終えたい。河上全集第一回配本の「第三巻」には先生が大正一四年に記された遺言らしきノートに「死後モシ著作集刊行ノコトアラバ、ソレニ入レテモライタキ旧著旧稿」として四部挙げているが、その一つは「人生の帰趣」であり、もう一つは生前未発表の「回顧三年」つまり第三巻では「余が懺悔と余が信念」である。これには昭和一七年九月一二日に付け加れた「前書」があって、それには次ぎのような注目すべき極めて重要な言葉がある。引用すると「この稿の中には、当時のある夜における不思議なる宗教的経験―その体験は長く私の一生を支配するに至ったものの―の記録が含まれている。今から見ると非常に幼稚な文章だが―これは私にとって中々大切な原稿である。」とある。「宗教的経験」というのは、ある夜、

天来の響きの如く先生の脳裏にひらめいた「キリストの再臨」との自覚を指すものであろうが、私のような凡愚には誠に残念ながら、そのような体験はないが、カブラ教授たちも、そのような神秘的（この神秘という言葉には私は絶対反対であるが、長くなるので、ここには言及しないが）体験を重視しているように、このような「宗教的体験」というのは、当時の、西洋コンプレックスの形而下の合理主義者の浅薄な頭脳では理解できない、超合理的の貴重な体験である。

河上先生が、中々大切な原稿であるとする「余が懺悔と余が信念」の上編は「余が懺悔」であり「無我愛」に没入した前後の思想を述べ、後編「現在の信念」において、断片的ではあるが「仏老」を包摂した「陽明学」の思想を展開しているのである。その第四「本来の我」には次ぎの言葉が見える。すなわち

五尺の形身は我に非らず、一塵の良心これ真我なり。良心は本と空の空、故に之を放てば則ち六合に弥^{あた}り、之を巻けば遠いて密に蔵る、合せば一頁の理となり、散せば万事の万理となる。要窮りなく、味窮りなし、玄のまた玄。

ここには「陽明心学」の真髓が述べられている。

また第三「道德の標準」の末尾には

「若し人、心外に理を求めんか、身を終るまで竟に一理の發明なからん、最も戒むべし」とあるが、これは、

朱子が「格物致知」の「格」をいたる」と読んで、「事々物々の理」に至らないと「良知」に到り得ないとしたのに対して解き難い迷路に陥み入って、遂に人間は正しい判断が不能になるのではないかとして、陽明は「格」を正すと読み、「物」は「事」であり、「事」を「行う」のは「意」が「動く」からであるとして、人間に本来具っている「良知」によって「意」を「正」せば、「事々物々の理」を窮めなくても「正しい判断」「正しい行動」が可能であるとした。しかも人間に本来具っている「良知」は陽明が三七歳、流竄の地竜場において「精神の革命」を遂げた貴重な体験から得たものである。

さらに断片的に河上先生は次ぎのような言葉も記している。

註サトウ

「身形は我が一生の仮釈（宅ではないのか）譬へば人の家におけるが如し。家のために人を殺すべからず、肉のために豈を殺すべからず。」「家のために人を殺した」のはスターリンの「虐政」ではなかったか？ここに私は河上先生の一介のマルクス主義者では理解できない尊

総 会 雑 記

貴博大なる精神を見ざるを得ない。「科学」は所詮「手段原理」であり、これをコントロールしなかったならば人類の滅亡は必至である。「手段原理」をコントロールすべき尊貴博大の「目的原理」は疑っても疑っても疑い得ない「宗教的啓示」による外ない。「科学的真理」にも含致し、かつ「宗教的真理」でもある、我々の依拠すべきものは「仏と老」を包摂した「陽明学」を描いて外にあり得ない。

× × × × × × × ×

「行」なき「知」は「知」に非らず。これを「懸空思索」と言い「空理空論」を弄ぶものである。

「知」なき「行」は「行」に非らず。これを「迷行妄作」と言い、原理なきデタラメの行為を言う。

福沢諭吉は西洋文明を紹介した大きな功労者であるが、同時に、その「脱亜の思想」で我々を西洋コンプレックスに陥れた元凶でもある。と言っても勝手に西洋コンプレックスに陥った我々の眼が狂っていたからであらう。

恒例の総会が河上肇の誕生日に当る一〇月二〇日の日曜日に開催された。法要と墓参ののち、昼食をとりながら参加者全員の自己紹介ではじめられた。参加全員とは言え、ご遺族の鈴木洵子さん、事務局の代表大門英太郎氏（最初にご発言があったようですが、記録されていません）、司会の大久保雅博氏、そして編集者の私とがなぜか自己紹介から落ちてしまいました。

先号掲載の松尾先生と本号の皆さんのご発言を読んでいたが、総会の雰囲気を感じとっていたいたり、思いついていただければ幸いです。なお林さんと大塚さんと政治家個人と政治の現実との理解にご議論がありました。また片山さんから当日回覧、お求めになりました核廃絶の国際署名とカンパについては、後日署名コピーとカンパの領収を事務局に送られてきていることを報告します。最後に山下さんよりの拙々堂のパンと般若湯の差し入れに感謝。（細川）

ひとこと釈明させて下さい

二 村 一 夫

(法政大学大原社会問題研究所所長)

会報第二十二号の松尾尊光さんの「河上肇と佐々木惣一」を興味深く拝読しました。ただ、お話の中で松尾さんが大原社会問題研究所の移転について触れておられるところは、読者の誤解を招くおそれがあるので、ひとこと釈明させていただきたいと存じます。

松尾さんは向坂逸郎先生の蔵書が大原社会問題研究所に入ることになったことを紹介された上で、次のように言われています。「ただ残念なことに大原社会問題研究所自体が八王子の山の奥に引っ込んでしまっただけで、大変不便な話であって、これまでは飯田橋のあたりで大変便利なお店があったんですが、そんな山奥に引っ込まれたんじゃ、こっちが乏しい財布をはたいて東京に出て、一日か二日余分に東京におらねばならんというようなことになって、はなはだけしからんと思っているんですけれども、ともかくそういう不便なところに向坂さ

んの本が入るんだということだけ報告しておきます」。

大原社会問題研究所がこの三月、都心の富士見校地から東京都町田市相原町にある法政大学多摩キャンパスに移転したことは事実です。そのことで、利用者の多くに、これまでより若干のご不便をおかけすることも確かです。しかし、ここ多摩校地は、新宿から京王線めじろ台まで特急で四十七分、そこから法政大学行きのバスで八分のところにあります。中央線でも特別快速なら東京駅から西八王子まで五十四分、バスで二十分ほどです。なにも一日も二日も余分にかけなくてもご利用いただけます。多摩丘陵の中にありますから八山の中Vではあります。八山の奥Vというほどではありません。

まあ、八山の奥Vか八中Vかといったことでは、それはどめくじら立てるほどの問題ではありません。ただ、大原社会問題研究所の移転を「はなはだけしからん」

と言われているのは、口が滑ったにしても松尾さんらしからぬお言葉で、いまさか残念に思います。

ご承知の方も多いと思いますが、大原社会問題研究所の図書・資料は、大阪から移転した当時の状態で長い間、新宿区柏木の土蔵に保管されていました。私立大学の乏しい財政のなから、二十年近くかかって整理し、十数年前より前からようやく利用が可能になりました。研究所はまた、個人所蔵の図書・資料を積極的に受け入れ、一般公開することにも力を入れてきました。もちろん私どもは、これらの本や資料の利用は法政大学の関係者だけに限ることなどは考えもせず、全く利用資格を問わず、どなたでも自由に閲覧いただくことを原則にしてきました。

資料を利用する時だけでなく毎日出勤している私たちが、多少交通の便が悪いことを我慢しても移転を決意したのは、研究所が重視してきた専門図書館・文書館としての機能を維持・発展させるためのやむをえない選択でした。たしかに富士見校地は都心の便利なところにありますが、それだけにスペースは限られ、拡張の余地はほとんどありません。ところが、研究所の書庫はすでに満杯で、一部の資料は遠く離れた保存用の書庫に移さざる

をえない状況にあり、新たに受け入れた図書・資料を整理することさえ困難になりました。新しいキャンパスに移れば、この問題が解決出来るとわかったとき、私たちは次善の策として移転を決めたのです。

こうした私達の選択が、利用者の皆様からすればまことに不便であるとお叱りを受けるのはいたしかたないと思います。しかし「はなはだけしからん」と言われてしまったのでは、長い間、直接自分の研究に使うわけでもない資料の収集・整理・複製に力を入れ、一般公開に努力してきたわれわれとしては全く立っ瀬がありません。

「はなはだけしからん」と言う言葉は、国民の税金で作られ維持されているのに、一般の利用に極度の制限を課している一部の国立大学図書館、たとえば自分の学部の学生の利用さえ認めない東京大学法学部図書館やそうした特権を当然のことのように享受してなんら改善しようとしぬ教授連に対して向けられるべきものではないでしょうか。

松尾さんのお話を直接聞いたわけではなく、会報に掲載された講演記録によっているので、松尾さんの真意を誤解して、場違いな抗議を述べたことになるのかもしれない。その節はお許し下さい。

ひとことおわびいたします

松 尾 尊 允

今回二村さんからの御寄稿を拝見いたしました。御趣旨まことにごもっともで、麻布時代から度々御厄介になり、とくにご刊行の日本社会運動史料に多大の恩恵を蒙っているものが、はからずも研究所の方々の不快を招く発言をしたことを、申しわけなく存じます。

昨年五月、向坂先生追悼会の席上で、御蔵書が研究所におさまることになったと承わり、これこそ先生の日頃のお考えに沿うものと、欣快に存じたことでした。ところが、秋になって講演直前に研究所移転のことを耳にし、衝撃を受けました。日常的に豊富な近代史関係資料を利用しうる東京地方の人々とちがって、関西在住の私などは年に何回か限られた時間内に上京して諸方の資料を探

索せねばなりません。私たちの東京における時間は、東京在住の人々の時間とは質的に違うのです。八王子方面への移転は御蔵書をいつも利用者に親切に見せて下さった先生の喜ばれることだろうかと思いました。研究所の学界における特殊の地位を配慮して、大学当局に現在地での拡充を何とか考えてもらいたかったという気持がありました。

私の口から不図出た「けしからん」発言の背景は以上のとおりです。国民の税金で維持されているのではない研究所の有難味を、空気や水のごとく自然に与えられるものと受けとっていたことを反省しています。

会 員 通 信

本号は総会が中心に編集されており、出席者の大半が発言されており、まず、「会員通信」は当日出席できなかった会員を中心に九月―十一月に受領したものから抜粋しました。(事)は事務局より。

Ⅰ 病氣・老齢・遠方 のため欠席

新幹線も当地まで通っておりませんが、やはり遠隔の地でありますからなかなか参加できません。御盛会を遠かにお祈り申し上げ失礼させていただきます。

盛岡市 横田 綾 二

京都方面に出かける折には必ずお

参りさせて頂いています。

福岡市 阿波 保 壽

修学旅行引率で十一月三―五日、

京都に泊ります。グループ見学の十一・四にはお墓に詣でる所存です。

小樽市 西 垣 邦 夫

(事) 十一・五付の名刺、墓傍にて拝見しました。

会員の皆様のうちで当地に来られる方がおりましたら電話下さい。あまり見る所ありませんが御案内致します。

稚内市 畑 佐 庸 夫

私の胸気では参加不能です。一日でも長く生きる事がなりたいと思っています。

貝塚市 尾 崎 義 一

今年こそ「法然院」へと気負いましたが、大事をとって今年も不参加です。

長野県 平 井 重 男

一昨年心房細動不全で救急車の恩恵を受け、奇跡的に一命とり止めましたが、それと腰足痛などで外出が出来ません。

東京都 高 木 右 門

体調を崩して居りますので欠席。田万儀七回忌には御多忙中御参詣賜わり感謝に堪えません。

大門苑 大阪市 田 万 明 子

最近が高血圧のため遠い所へ行くのをひかえております。

神戸市 岡 南

残念ながら小生よわい七十路を過

が最近気力も衰えまして出席いたしかねます。

東京都 金子 楽

昨年十二月脳内出血で入院、回復はいたしましたが不自由になり、他出できなくなりました。

京都市 牧 健二

是非一回は出席したいと思いますが、今度は少々体の調子をこわして、その意を得ません。

都城市 小野 総一郎

足痛歩行不自由のため、残念ながら欠席します。

京都市 大釈 春雄

九月の連休に京都の自宅へ帰った際、久し振りに法然院へ足をのびしました。

広島市 京 藤 英一郎

昨年は総会に出席致しましたが、今年は高血圧・貧血で養生しております。

京都市 堀野 千代

健康上の理由のため欠席せざるをえません。しかし日常生活にはそれほど重大な支障はないので、まず何とかやっています。

京都市 岡部 利良

□ 所用などのため欠席

私は土・日・祝日などがいそがしい仕事をしている関係で、心ならずも欠席しがち、いつも残念に存じております。

豊中市 後藤 嘉七

例年十月の法然院でのお集りには亡夫と共にいつも参加させて頂き、河上先生のお墓にお詣りさせて頂き古いお知り合いの方々にお目にかかることが出来、うれしく思っております。

池田市 相澤 実子

戦後政治の総決算をめざす中曾根内閣のもとで平和も民主主義も重大な危機に直面していますが、この秋の臨時国会を元気で頑張っています。

吹田市 橋本 敦

農繁多忙のため出席できません。

経済的な貧乏は表面には見えませんが、心を亡くす忙という貧困の中であらためて貧乏物語を読むつもりです。

長野県 両角 康則

洛北の法然院に眠る師を、偲ぶ時
月の河上蟄忌

松戸市 高沢義人

当地も急に秋冷の感あり。毎日業
務に追われ充分な読書も出来ません。

熊本県 井上栄次

今度はファシズムと戦争（第三次
大戦は終末戦争での）の時代を許し
てはなりません。さし当り中曾根内
閣打倒にむかって全力をつくしたい
と思います。

東京都 高沢寅男

只今のところ繁忙につき何ともな
りませんが、然しそれ文に烈しくき
びしいものが大事と思っています。

京都市 岡本道雄

国民の良識が声を大にして反戦・

反軍備・使い古した国民精神への復
帰を阻止しなければずると深み
に入り愚かな現実には戦く事になりそ
うです。

双方市 中瀬博忠

(三) 学問と人と

残された時間を比較社会史の研究
のために用いたく思っています。

京都市 大野英二

亡父七回忌を来年にひかえ、田辺
納刊行会発足しました。若し故人を
知る方で、追想を執筆いただければ
幸甚です。岸和田市春木若松町 御
春木病院内 田辺納刊行会事務局

岸和田市 田辺平

本年は龜見没後八年、私は八十才
に成りました。当地旧友会と党の方

々が「明治時代の野呂栄太郎」を刊
行いたしました。逸見追悼をもちね
るとして私も書かせて頂きました。

藤沢市 逸見千鶴子

明治中期を舞台にして日本の社会
主義思想導入期における当時の社会
主義協会に参加して活躍をしていた
人物に焦点を当てて原稿をまとめて
います。

横浜市 佐藤敬治

急の思立ちで近く転居の予定でそ
の準備などで取込中なので失礼致し
ます。折角故人の誕生日に開催なの
に残念ですが、あしからず御了承下
されたく、御出席の各位へよろしく
お願ひ申し上げます。

京都市 羽村二喜男（シズ）

会報で安井功氏御他界のことを知

り突然としておりましたところ、今度は八月二七日、松俊夫氏が亡くなられたということです。数年前、松氏から安井氏を紹介され、いらい何度か三人で京都のここかしこをまわったものでした。

日野市 上木 敏郎

過日、義父故安井功葬儀の折には会よりも過ぎた心遣い痛み入り、改めて謝します。今年に義父についての報告と参上しての前述のお礼申し上げるべき処、小生の会社の者の婚姻で出席できません。申し訳無き事と存じますがお赦し下さい。

京都市 森田 茂

河上先生の晩年の主治医であった安井病院院長の安井信雄氏が亡くなられて九年になります。御二方が地下で昨今の社会情勢を見て居られる

とすれば、どの様に行動をされるかと思う此頃です。

京都市 安井病院 足立道五郎

四 河上先生と私

何年か前、偶々法然院の先生のお墓をお詣りしたのが縁で会に加えて頂いた者です。高校も大学も京都ではありませんでしたので、結局、本を通じてしか先生に接する機会はなかったわけですが、先生の実想・学問以上に心惹かれてやまないのは先生の生き方です。

武蔵野市 旭 季彦

河上先生について、「資本論入門」などを読んだだけで、ほとんど存じ上げていませんが、ただ一つ、今から思えば血も沸くような時代に自分の学問の指し示す道を勇氣を以て進

まれた、そして嵐の中で真面目に悩み、苦しまれた一人の先人として尊敬しています。

奈良県 上野 晃

小生昭和一行合生まれの高校教師で、直接博士にお目にかかったことはありません。ただ大学時代、博士の「第二貧乏物語」などで感銘を受け、そのご自叙伝などを読ませて頂いて、経済学ばかりでなく「如何に生くべきか」色々学ばせて頂きました。

敦賀市 岡田 正夫

河上先生のお墓にもしばらく行けていません。河上先生への思いが、今はなき父親への思いと重なってしまっただけかも知れません。河上精神と言われたものを忘れず生きていこうと思っております。

京都市 岸 本 正 美

私は河上博士を中心としたテーマの卒業論文を提出して昭和二十一年九月に大学を卒業しました。その後、

日本農民組合・日本社会党書記局等を経て、昭和四十七年から現在迄衆議院議員として五期十四年目になります。この間、河上先生の著書なり詩歌を大事にしてくださいとき読みながら、ときし日を出します。先生は人間として立派だといつも思っています。

土浦市 竹 内 猛

河上先生が大正九年に紀州田辺に滞在された時のことは兄堀村義太郎が東京河上会で御報告しておりますが、その時先生の田辺の御宿の御世話をした堀村民次郎は私の養父であります。御宿へ御飯のおかずをお届けした後、先生の散歩の御供をした

時、漬物にするため屋外に乾してある沢山の白い大根を見て先生は美しいといってスケッチをされたことなどもあったようです。

田辺市 堀 村 孝三郎

続六 自叙伝(中)をよんでいます。自分をかくそうとしない正直さ、自分をてられない素直さ、自分の良心に忠実でありたいという真面目さに心を打たれております。

長野県 山下 干一

河上先生がrippな先生であることは充分存じているつもりですが、河上先生の弱点についても年をとってから気がつくようになりました。記念会では、先生の弱点について触れることはまずいのかどうか、ほめておきさえおればまちがいはないような空気が感じられないではありません。

せん。

京都市 和田 洋一

(事) 私見ですが、批判精神は河上がもっとも重んじた心かと思っています。多方面からの河上筆論を期待しています。(紀平)

河上肇博士の「開戸閨人」の心境です。「自叙伝」を友とし数読している昨今です。

京都市 田村 浅雄

昭和二十一年の冬か春頃でした。ちゃんちゃん風茶羽織を着て弁当箱に何か食料品を石川興二先生に、「石川さん、どうぞ」と言われていた様に思いますが、神楽岡の石川先生のお宅で御目にかかったのを思い出します。

枚方市 中瀬 博次

(事) 日記をあちこち開いてみまし

たが、いつのことか確とは発見できません。またお聞かせ下さい。

わたしも学生時代、「経済学大綱」

で育ちました。忘れられない思い出です。そのご、今年物故されました向坂逸郎先生より、しばしば河上肇の話しを聞かされたものです。向坂先生は、社会科学にたいするアプローチは違いましたが、自分の青春の知性を湧き立てた一人は河上肇だといつもいっておられました。

福岡市 荒牧 正 憲

因 会報のことども

ハンディな姿でしかも活字が大きくなり、読み易く、編集者の皆様方のご苦労が身にします。この夏は一人娘の学ぶ立命大を尋ね、河上さんの休まれる法然院をもたずねる事

が出来ました。

防府市 上田 隆

(事) 会報新装は概ね好評のもよう
で他に同趣旨の通信を幾通か頂戴して編集者一同、悦に入っています。しかし次のような通信もあり、今後に生かしたいと考えています。

活字が大きくなったかどうかかわかりませんが、たしかに読みやすくなりました。又内容も充実しました。会報を通してでも会員の河上肇論、大いに盛んになればもっと面白くなると思います。

徳島市 中谷 武雄

誌型が変わったのは結構ですが、表紙をいま一工夫されては如何ですか。これではいかにもモッサリしていて、古典味も新鮮味も無いように思えます。給金には体面不良のため

欠席致します。実に残念です。

西宮市 石井 公代

会報は毎号隔ずみまで読んでいます。時には、若干抵抗を感じるものもありますが、それもそれなりに、「興味」を覚えます。沖本様たちの「岩国紀行」は羨ましいかぎりです。

東京都 大島 久治郎

投稿を楽しく拝見しましたが、米浜さんの感想にはいろいろ反省させられました。敗戦による反省がいつの間にか故意に風化される時、河上先生を尊敬する記念会参加は良心を守る市民として必要かと思えます。

京都市 山崎 利一

かつて河上博士逮捕の頃、中央公論に「二勝の河上博士」という文章が出て好評であったことをおぼろ氣

に覚えています。できれば活字を小さくしてでも会報に再掲下さるならばありがたいことです。

京都市 三好 卯三郎

(事) 全集続六 自叙伝(中)にその主な部分が掲載されています。

会報二一号の米浜氏稿懐しく興味深く拝読致しました。老生昭和初期に津田青楓邸近くに居住したこともあり、それだけに河上先生との対比にうなづけるものがありました。詩人としての河上先生の紹介記事も増やしてほしいと念じて居ります。

滋賀県 大井 清

先日、七月一日付第二〇号を拝読しているうちに「気になること」がありましたのでひとことふれておきたいと思います。

第二〇号には、「百年祭のとき」

「梅田勝が河上博士の墓前で河上博士を『卑怯者、裏切り者』と罵倒したとのことですが……会として中央委員会に正式に抗議されてはいかがでしょう?」という一文がありました。

河上肇生涯百年祭には、私も姉夫婦と一緒に出席致しました。そのときの梅田勝さんの挨拶は原稿にもとづいたもので、私たちには「『卑怯者、裏切り者』と罵倒した」などという印象はまったくありません。

この百年祭のときには、すでに日本共産党中央委員会としての河上肇の評価が発表されており、当然のことながら梅田さんの挨拶はその評価にもとづいたものでした。

私は、河上肇の評価にさいして、その不充分さと誤り、否定的な面を忘れないことが大切だと思っていますが、梅田さんの挨拶ではその点が

きちんと節度をもって述べられておりました。

それが「罵倒する」ような叙述でなかったことはいうまでもありません。そもそも、原稿を用意して挨拶にのぞみ「罵倒する」人はいないでしょう。

河上肇の墓地には「たどりつき、ふりかへりみれば山河を、越えては越えて来つるものかな。」という碑があります。迂余曲折の道をおとってたどりついたところが、日本共産党であったこと。ここに、河上肇の生涯から学びとるべき中心点があると思います。

もし、「会として共産党に正式に抗議する」ことにでもなれば、記念会を共産党に對抗させることにもなり、それこそ、さけなければならぬことです。当人の評価などをめぐって意見があれば、適切な方法で率

直に意見をかわし、理解を深めるようにすることこそ本来のあり方だと思ひます。そうでなければ、河上肇を共産党からかけはなれた、ときには対立した存在にしてしまい、当人の意思にもそむくものとなることはあきらかです。

寄稿者は、「罵倒したとのことですが」という「つたえ聞き」を前提にしておられますが、それにしては大要な結論をひきだされたこととなります。

墓前祭の実態の様子もさることながら、河上肇についての肯定的な面、否定的な面、両面にわたる冷静な、正確な評価を前提にされることが大切だと思ひます。

岩国市 河上 莊 吾

東京都の松田様の記事でございすが、事務局の大久保様の「事務局

より」の中にも書かれておりますが「墓前に詣でた人間の一言、一句を取り出して党との関係を云々することの妥当性に私個人は疑問を感じます」という御意見は同感です。それは会則の(三)にもあるように現実的には若干の政治的立場の違い人たちもあるかも知れませんが。

私は河上先生は直接存しております。「貧乏物語」を通じて尊敬する「先生」であり「指導者」だと信じて入会させて頂いております。松田様の記事の中で「梅田勝が」と敬称略で書かれておられますが、いささか感情的ではないでしょうか。私も一寸疑問に感じまして、出席者の一人として、松田様の御指摘のような「学者・知識人全体を敵にまわし統一戦線を破壊するもので黒過できません」といわれるような印象をうけた記憶がございますので、日

本共産党京都府委員会におたづねしましたところ、その原稿があるとききましてコピーして送ってもらいました。

「卑怯者、裏切り者」という言葉はどこにもありません。私の記憶の通りでした。

「転向」という重大な誤りを犯しながらも、ぎりぎりの一線にはふみとまり、日本共産党こそ時代の光明であり——離れる方が正しくないとする考へをいだきつづけた——「わが党は河上肇先生の生涯から貴重な教訓を学ぶとともに」と梅田勝衆議院議員は高く評価され決意を表明されております。

「そういう人間を代表として——党の名譽のために惜しみます」という大久保様の記事も 記念会報としては少し残念に思ひます。

綾部市 井上 甚太郎

内会について

米浜氏の「東京河上会報に関する二、三の感想」を読み感ずるところがありました。その通りだと思えます。河上の著作を少しでも深く読もうとする人の研究発表誌にしていたきたいものです。

滋賀県 前川 文夫

河上症候群を早く治し、昨年宇都宮先生が講演された如く命がけで真理を主張しかつ実行しないと大変なことになる様な気がします。総会出席者の中から年齢区分毎に一人ずつ発言してもらう様にしてはどうですか。

神戸市 内野 治幸

会員層の老齢化を示した統計も大

変興味深く拝見し、米浜会員の御提案と併せて大いに考えさせられました。といって格別の名案があるわけでもありません。

浦和市 木村 太郎

山口県在住会員で本会と目的を同じくする会組織の話しがおこっていることはよろこばしい事と考えています。

徳山市 脇 英夫

アンケート集計報告の年令区分、私共がもっと若い層に、この会のあること、あるいは若い年代に河上齋を知ってもらうことを努力せねばと思いました。

熊本市 小谷 正守

このままでは河上会は老衰するばかりのように思います。それでこの

際、「もし先生がいま生きておられたとしたら、どんな社会的行動を提唱されるだろうか」という視点に立って「河上精神」なるものを現代に生かす工夫をすることが必要かと存じます。

横浜市 高桑 末秀

「腰弁で事務局へ奉仕して下さる方」との事務局からの要請に対し「勤務先も大阪市内ですから、もし私のようなものでよければお手伝いさせていただきます。（高槻市・紀平龍雄）という趣旨の、所用で総会欠席の通知を出したら、はたして大久保氏から連絡があり、こうして「会員通信」の整理のお手伝いをする事になった次第です。四十代前半の私のすることですから誤りも多く、礼を失するところもあろうかと存じます。ご容赦下さい。（紀平記）

入会のおすすめ

河上肇記念会は、関西を中心として正式に発足して満十二年になります。毎年秋には、河上の墓前に集まり、法然院にて法要を営み、会の総会を開いております。会員の資格は会則にある通り、河上先生に学び、先生を知ろうとする人びとです。是非ご入会をおすすめします。

会員の皆さまには友人、知人にこの会をご紹介します。



会報 (回覧雑誌)

河上肇記念会 会 則

- 一、この会は河上肇記念会と称し、大阪市(または京都市)に事務所を置く。
- 二、この会は、河上肇先生の人格とその業績を讃え、これを広く、かつ永く伝えるための研究ならびに事業を行う。
- 三、河上肇先生を敬慕し、先生に学び、先生を知ろうとする人びとを会員とし、いかなる資格ならびに政治的立場を問わない。
- 四、毎年一回総会を京都で開催、その他随時集会および事業を行う。
- 五、この会の会友および世話人は別の定めによつて選び、總會において承認を与える。
- 六、世話人代表はこの会を代表し、世話人中の事務局担当が事務を執行する。
- 六、この会の経費は、会費ならびに寄付金をもつてあてる。
- 七、この会費は年額三〇〇〇円とする。
- 七、この会則の改廃は總會の議決による。

転居通知のお願い

転居、住居表示変更などのあつた場合は
事務局へご一報下さい。

〒五四二 大阪市南区島ノ内二〇一九

(丸善石油ビル) 千代田商事株式会社内

河上肇記念会



貧乏物語 初版

〒 542

大阪市南区島ノ内二〇一九 (丸善石油ビル)

千代田商事内 河上肇記念会

電話 (〇六) 二五二一三六九六

振替口座 大阪 三三一九五

京都(きょう)に煙あり

1965年 創刊 只今49号

「煙」同人社

京都市中京区西ノ京薩ノ木町11の24

児玉 誠 方

電話 京都 (075) 811-7646 番

振替 京都 2-15653 番

戦前日本プロレタリア文化運動の生き残り10名(73~83才)が出している異色の同人誌。語り部として戦前活動家の埋もれた青春像の発掘を柱に「煙」を編集・発行する一面、同時に戦後への架け橋たらんとしてもいます。

A 5版 120頁 頒価 500円 〒 200円